

論 説

学校と地域とのかかわりの記憶

——閉校記念誌からみた京都府南山城村における学校統廃合——

四 方 利 明

目次

1. はじめに
2. 京都府南山城村における学校統廃合と閉校記念誌
 - 2-1. 京都府南山城村における学校統廃合
 - 2-2. 京都府南山城村における閉校記念誌
3. 閉校記念誌にみる学校と地域とのかかわり
 - 3-1. 教育活動における学校と地域とのかかわり
 - 3-2. 地域の拠点としての学校
4. むすびにかえて

1. はじめに

近年学校統廃合が全国で進行している。2015年1月には、文部科学省が「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」（以下、「手引」と記す）を策定し、このことの「通知」を全国の都道府県教育長、知事らに宛てて出している。「通知」に添えられた資料によれば、全国の公立小学校数は、1984年度に24,822校であったのが、2013年度には20,836校にまで減少している。この30年ほどで実に4,000校近くの小学校が閉校となっているが、とりわけ2000年代に入ってから¹⁾の減少幅が大きく、学校統廃合が積極的に進められている。

「手引」では、さらにこうした動きを加速させようとしている。学校統廃合にかかわる基準は、これまで二つのものが存在してきた。一つは、学校規模の基準である。学校教育法施行規則には、小中学校にあっては、「12学級以上18学級以下を標準とする」と定められている。つまり、小学校では1学年2学級～3学級が「適正規模」とされている。もう一つの基準は、通学距離の基準である。義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律施行令には、「通学距離が、小学校にあってはおおむね4キロメートル以内、中学校にあってはおおむね6キロメートル以内であること」と規定されている。これら二つの基準に加え、「手引」では、スクールバスによる通学を念頭に、通学時間が「おおむね1時間以内」という新たな基準が加わった。スクールバスを活用することで、従来の通学距離基準を超えた範囲での学校統廃合を後押しするものといえるだろう。

学校統廃合を進める際には、少子高齢化社会の到来にともない、学校に在籍する子どもの数が

少なくとも、子どもたちどうして「切磋琢磨」できないという教育上のデメリットが生ずることが、その理由として持ち出されることが多い。たとえば、先の「手引」の冒頭においても、「児童生徒が集団の中で、多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて一人一人の資質や能力を伸ばしていくという学校の特質を踏まえ、小・中学校では一定の集団規模が確保されていることが望ましいものと考えられます」と述べられている。

しかし考えてみれば、少人数ならではの特色を活かした教育の利点もあるだろう。たとえば、以下に本稿で取り上げる旧南山城村立高尾小学校の閉校記念誌（以下、『高尾』と記す）には、同校において1985年に教職員としてのキャリアをスタートさせた、元教職員による以下のような手記が掲載されている。

当時の高尾小学校は、児童数が25人でした。勿論子ども達の名前も顔も知っていて、昼休みは毎日子ども達と遊んでいました。毎日が全校遊びで、高学年は低学年の子ども達も楽しく遊べるように工夫していました。／給食はランチルームで子ども達も先生もみんなそろって食べます。子ども達からいろんな話を聞くことができ、とても楽しかったのを思い出します（『高尾』、11頁）。

児童数が少ないがゆえに、教職員が全校児童全員を把握しており、また豊富な学年縦割り活動の経験を通して高学年の子どもたちが低学年の子どもたちを慮ることを学び、さらには学校の子どもたちや教職員が全員そろって歓談しながら給食を食べるなど、少人数教育の魅力がよく伝わってくる。

また、旧南山城村立野殿童仙房小学校の閉校記念誌（以下、『野殿童仙房』と記す）には、1994年の卒業生による以下のような手記が掲載されている。

幼少期の話をする度に、全校生徒40数名の小学校に通っていたことは貴重な経験だったのだと気づく。／毎日の授業で、教科書の内容を早く終わらせて山や川へ遊びに行くなんて、普通はないらしい。当時先生方に教わったいろんなことが、現在の私の礎となっている。／…（中略）…取り巻く環境もすばらしかった。／…（中略）…周りを囲む自然…春には桜が咲き、夏には校庭の隅に流れる水辺でハンカチを濡らして涼を取った。秋は裏山から降ってくる落ち葉に心を躍らせ、冬になるとスキューエアで雪合戦に雪だるま作り（『野殿童仙房』、32頁）。

自然に囲まれた環境において、少人数によって行われた学校教育の経験が、大人になってから大変肯定的に当人のなかに位置づいていることがわかる。このように、子どもたちが少ないがゆえの学校教育上のメリットは十二分に考えられる。また、後述するようなこれまで地域とのかかわりでなしえてきた学校の教育活動が、学校統廃合によって学校と地域との物理的、心理的距離が遠くなるがゆえに途絶えるというデメリットが生ずることもあるだろう。しかしながら、学校統廃合が推進される状況においては、少人数では「切磋琢磨」できないという、量的問題に還元され、かつ人数が少ないことを否定的にのみとらえる教育的なロジックが優先される。

さらに、学校統廃合が進むなかで等閑視されがちなのは、閉校となることでもっとも大きな影

響を被る地域であろう。少子高齢化ゆえに閉校という選択肢を決断したのであるが、閉校となれば子育て世代が当該地域に残りづらくなるので、さらなる少子高齢化を招くことは自明であろう。また、学校は地域とのかかわりを有し、地域の拠点としての役割をも担ってきた。にもかかわらず、当面「切磋琢磨」論による学校統廃合が続いていくことになるだろう。

本稿では、学校統廃合が推進される際に等閑視されがちな学校と地域とのかかわりについて考えてみたい。そこで、着目するのが、閉校となった学校と地域とのかかわりが、どのように記憶されようとしたのかである。具体的に本稿で取り上げるのは、京都府南山城村において閉校となった4つの小学校の閉校記念誌である。

閉校記念誌には、閉校となった学校にかかわる創立以来の資料が整理されていて史的価値を有する。さらには、閉校となった学校にかかわった多様な人々の、学校に対するさまざまな想いが掲載されており、学校にかかわって地域がとどめようとした記憶の一端がかいまみえている。しかも、4つの小学校の閉校記念誌を重ね合わせると、学校と地域とのかかわりは一様ではないことも看取できる。地域による違いも含めて、学校と地域とのかかわりがどのように記憶されようとしたのかをみることによって、学校統廃合を「切磋琢磨」という教育的ロジックによって受け入れた地域にとって、学校がなくなるということの持つ意味について考えてみたい。

2. 京都府南山城村における学校統廃合と閉校記念誌

2-1. 京都府南山城村における学校統廃合

京都府南山城村は、京都府唯一の村であり、1955年に高山村と大河原村が合併して発足した。奈良県、三重県、滋賀県と県境を接し、府内でも有数の茶の産地である。村の人口は4000人前後で推移してきたが、ここ近年は減少し、2015年11月30日現在の人口は、2938人である²⁾。南山城村は、高尾、田山、本郷、押原、奥田、今山、月ヶ瀬ニュータウン、南大河原、野殿、童仙房の10地域から構成され、それぞれの地域に区（月ヶ瀬ニュータウンは自治会）が設置され住民自治を担っている。

南山城村には、元々村立の、高尾、田山、大河原、野殿童仙房の4つの小学校があったが、高尾、田山、大河原の3校が2002年度をもって閉校となり、2003年度より新設の南山城村立南山城小学校に統合された³⁾。残る野殿童仙房小学校も2005年度をもって閉校となり、2006年度からは村内の小学校は南山城小学校1校となった。

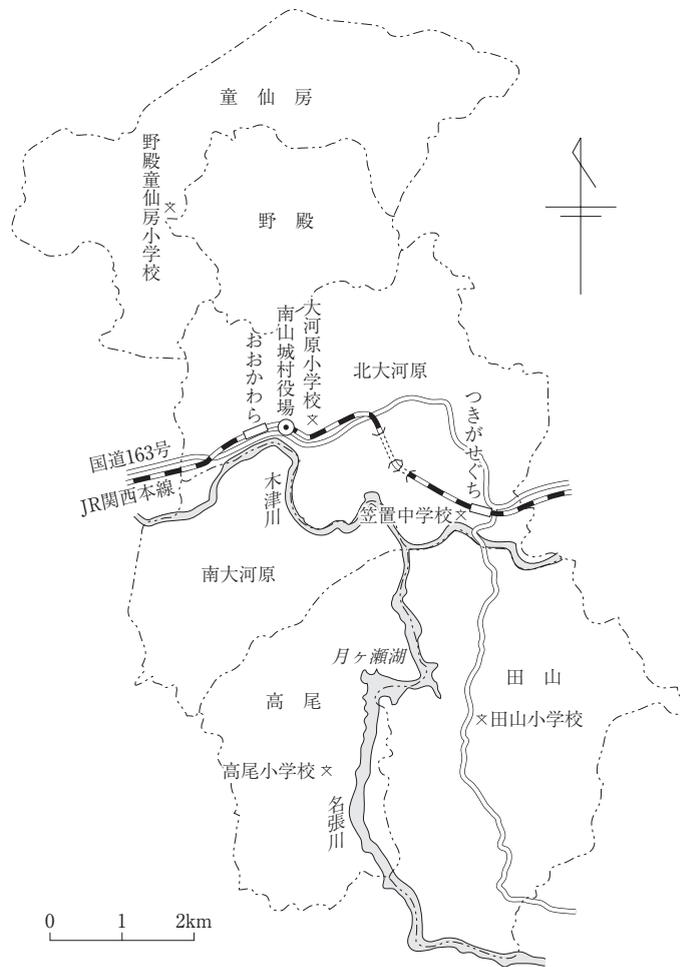
4つの小学校の概要は表1の通りである。また、図1の南山城村全域図には、4つの小学校の所在地が示されている。高尾小学校と田山小学校の校区は、それぞれ高尾区、田山区の範囲と重なっており、校区と地域の範囲がほぼ1対1対応している。野殿童仙房小学校区は、野殿区と童仙房区にまたがっており、小学校は両区のはほぼ境界上に位置している。大河原小学校は、図1をみると北大河原に位置しているが、北大河原には、本郷、押原、奥田、今山、月ヶ瀬ニュータウンの各区が含まれ、小学校は本郷区に位置している。大河原小学校校区は、北大河原の各区と南大河原区にまたがっている。なお、大河原小学校のなかで児童数をもっとも多日月ヶ瀬ニュータウンの子どもたちは、JR関西本線の月ヶ瀬口駅から大河原駅まで一区间列車に乗車して通学し

表1 南山城村の学校統廃合によって閉校した4小学校

	高尾小学校	田山小学校	大河原小学校	野殿童仙房小学校
校 区 (区)	高尾	田山	本郷, 押原, 奥田, 今山, 月ヶ瀬ニュータウン, 南大河原	野殿, 童仙房
創 立 年	1875年	1874年	1873年	1982年
閉校時児童数	11名	28名	99名 ^(※)	14名

※大河原小学校の区別の児童数の内訳は、本郷23名、押原1名、奥田6名、今山9名、月ヶ瀬ニュータウン53名、南大河原7名である。

図1 南山城村全域図



(出典) 「南山城村大字図」南山城村史編さん委員会編『南山城村史 資料編』, 2002, 19頁

ていた。統合新設校である南山城小学校は、月ヶ瀬口駅、及び月ヶ瀬ニュータウンに近い今山区内の土地を新たに造成して建てられ、同一敷地内には南山城保育園、南山城村保健福祉センターが併設されている⁴⁾。

閉校となった小学校の創立年は、野殿童仙房小学校以外の3つの小学校は、1872年の学制発布によって日本において近代学校制度が発足してからまもない時期である。もっとも、野殿童仙房小学校は、1982年の創立以前に、分校、分教場としての前史を有している。『野殿童仙房』に掲載された「学校沿革」によれば、1902年に大河原小学校分校教室が創設され、1941年には大河原国民学校童仙房分教場となり、戦後は1947年に大河原小学校童仙房分校、1955年には同野殿童仙房分校となった後、1982年に独立して野殿童仙房小学校が創立された。

閉校時の児童数は、最も多い大河原小学校で99名⁵⁾、次いで田山小学校の28名、野殿童仙房小学校の14名、最も少ない高尾小学校は11名である。児童数の減少が学校統廃合の要因の一つとなったことがうかがえる。なお、野殿童仙房小学校も閉校となって、南山城村内の小学校が南山城小学校1校となった2006年度の同校の児童数は、152名である⁶⁾。学校統廃合を実施しても、普通学級は1学年1クラスの学校規模で、先にみた国が定める「適正規模」基準を下回っている。

2-2. 京都府南山城村における閉校記念誌

閉校となった4つの小学校の閉校記念誌はすべて刊行されている。表紙に記された刊行主体は、『高尾』と田山小学校の閉校記念誌（以下、『田山』と記す）は閉校記念事業実行委員会、『野殿童仙房』は閉校記念事業準備委員会、大河原小学校の閉校記念誌（以下、『大河原』と記す）は大河原小学校となっている。また、閉校記念誌の編集に際しては編集委員会が組織され、編集委員会の構成は、編集後記によれば、『田山』は、歴代PTA会長と閉校年度のPTA役員、および教職員であり、『大河原』と『野殿童仙房』は、さらにここに校区内の各区長が加わっている。『高尾』は、編集後記がなく明確には記されていないが、巻頭の閉校記念事業実行委員会委員長や校長のあいさつによれば、同様の編集委員会が組織されていたようである。

それぞれの閉校記念誌の構成を一覧にしたものが表2である。A4サイズであることや、巻頭に校歌とあいさつが掲載されている点、それから、歴代校長や育友会（PTA）会長の名簿が掲載されている点や、卒業生や元保護者、元教職員が閉校にあたっての手記を寄せている点は、すべての閉校記念誌に共通している。

一方で、それぞれの閉校記念誌毎の違いもみられる。たとえば、『田山』と『大河原』には、「最終年度の教育」として、最終年度である2002年度の教育方針や学校経営構想、児童数、校内図等が掲載されているが、『高尾』と『野殿童仙房』には、そのような資料は掲載されていない。また、『高尾』以外の3誌にはそれぞれの学校の沿革が掲載されているが、『高尾』には掲載されおらず、代わりに、1898年度から2002年度までのすべての年度の卒業写真が掲載されている。『高尾』に掲載された卒業写真をみると、1934年度より男子が学生服を着用しはじめ、その3年後には女子もセーラー服の着用を開始しており、子どもたちの洋装化の過程を追うことができ興味深い。また、1948年度、1982年度の卒業写真を境に、校舎の外観が変わっている。寄せられた手記とつきあわせてみると、前者は戦後直ぐに現在地に移転して新設された2代目の木造校舎、後者はその後鉄筋コンクリート造に建て替えられ今なお現存する3代目の校舎であることがわかる。このような閉校記念誌の持つ史料の有用性については、もう少し顧みられてもよいように思う。

さて、どの閉校記念誌にも、これまでそれぞれの学校にかかわってきた多様な人々から、閉校

表2 閉校記念誌4誌の構成

『高尾』	『田山』	『大河原』	『野殿童仙房』
校歌	校歌	校歌	校歌
(あいさつ) (1~3頁)	挨拶 (1~8頁)	あいさつ (1~4頁)	ごあいさつ (1~6頁)
恩師からのメッセージ (4~19頁)	歴代校長先生から (9~15頁)	沿革 (5~7頁)	歴代校長より (7~9頁)
地域の思い (20~28頁)	最終年度のPTA 会員から (16~27頁)	歴代校長・PTA 会長名簿 (8頁)	歴代育友会・PTA 会長より (10~11頁)
歴代校長名簿 (29頁)	卒業生、恩師から (28~43頁)	歴代校長先生方 (写真) (9頁)	歴代教育委員・区長より (12~15頁)
歴代育友会長名簿 (29頁)	田山小学校のあゆみ—田山小学校沿革 (44~53頁)	閉校に思いを寄せて (一般寄稿) (10~26頁)	歴代教職員より (16~29頁)
旧教員名簿 (30頁)	児童数の推移 (54~59頁)	児童を見守りつづけた写真 (27~30頁)	卒業生から (30~35頁)
再会 (昭和56年度卒業生と保護者のタイムカプセルを高尾小学校お別れ会時に20年ぶりに開封) (31~32頁)	田山小学校最終年度の教育 (60~75頁)	資料 (31~43頁)	最終学年に学ぶ子どもたちから (36~42頁)
高尾小学校お別れ会写真 (33~34頁)	写真集 (76~105頁)	児童と職員の FOREVER (44~77頁)	最終年度のPTA 会員から (43~46頁)
卒業写真 (明治31年~平成14年) (11~52頁)	歴代校長一覧 (106~108頁)	PTA 会員寄稿 (77~80頁)	最終年度の教職員から (47~52頁)
	歴代職員一覧 (109~116頁)	思い出の校舎 (80~81頁)	永遠のふるさとに誇りを (新聞記事切り抜き) (53頁)
	田山小学校育友会・PTA 歴代会長一覧 (117頁)	大河原小学校最終年度の教育の概要 (平成14年度教育方針) (82~85頁)	学校沿革 (54頁)
	編集後記	閉校セレモニーの様子 (86~90頁)	卒業生・PTA (育友会) 会長名簿 (55頁)
		編集後記	教職員名簿と児童数推移 (56頁)
			思い出 (学校の四季 (写真), 卒業記念写真 (平成14年度~平成17年度), 広報南山城・京都新聞記事より) (57~67頁)
			編集後記

※網掛けした項目は手記。なお、『高尾』には、「あいさつ」という名称の項目はないが、内容としては巻頭のあいさつである。

に際しての手記が寄せられているが、こちらも閉校記念誌毎に違いがみられる。表2にまとめた閉校記念誌を構成する各項目のうち、網掛けをしたものが手記であるが (巻頭のあいさつも手記に含めた)、それだけを抜き出し手記の構成を一覧にしたものが表3である。

手記の記述者毎の分類がもっとも細かいのは、『野殿童仙房』であり、分類毎に記述者の属性が明確である。一方、『高尾』は、あいさつを除くと2項目である。『高尾』は、『田山』や『野殿童仙房』では別に分類されている歴代校長と校長以外の元教職員による手記が、「恩師からのメッセージ」に一括されている。さらに『大河原』は、歴代校長や元教職員による手記に加え、

表3 閉校記念誌4誌の手記の構成

『高尾』	『田山』	『大河原』	『野殿童仙房』
(あいさつ) 【内訳】高尾区長(卒業生)、高尾小学校閉校記念事業実行委員会委員長、校長	挨拶 【内訳】田山小学校閉校記念事業実行委員長、校長、南山城村長(卒業生)、南山城村教育委員会教育長(卒業生、元教職員)、南山城村教育委員会教育委員長職務代理、PTA会長、田山区長(卒業生)、校医(卒業生)	あいさつ 【内訳】閉校記念誌編集委員長・PTA会長、校長、南山城村長、南山城村教育委員会教育長(元教職員)	ごあいさつ 【内訳】PTA会長、校長、南山城村長、南山城村教育委員会教育長、南山城村教育委員会教育委員長、南山城村教育委員会教育委員(卒業生)
恩師からのメッセージ…24名(うち、卒業生2名)	歴代校長先生から…9名(うち、卒業生3名)	閉校に思いを寄せて(一般寄稿)…23名 【内訳】卒業生12名、保護者3名、卒業生かつ保護者1名、教職員6名、卒業生かつ教職員1名	歴代校長より…4名
地域の思い…17名 【内訳】卒業生9名、保護者2名、卒業生かつ保護者5名、不明1名	最終年度のPTA会員から…16名 【内訳】保護者2名、卒業生かつ保護者6名、教職員8名	児童と職員のFOREVER…114名 【内訳】在学児童101名、教職員13名(うち、卒業生1名)	歴代育友会・PTA会長より…3名(うち、卒業生2名)
	卒業生、恩師から…22名 【内訳】卒業生16名、保護者2名、卒業生かつ保護者2名、教職員2名	PTA会員寄稿…6名 【内訳】保護者4名、卒業生かつ保護者2名	歴代教育委員・区長より…5名 【内訳】卒業生1名、卒業生かつ保護者3名、保護者1名
			歴代教職員より…17名
			卒業生から…10名(うち、かつ保護者1名)
			最終学年に学ぶ子どもたちから…14名(在学児童全員)
			最終年度のPTA会員から…6名(すべて保護者)
			最終年度の教職員から…7名(在職教職員全員)

卒業生や元保護者による手記も「閉校に思いを寄せて(一般寄稿)」に一括されている。『高尾』の「地域の思い」には、『田山』や『野殿童仙房』では別に分類されている卒業生や元保護者による手記が含まれている。

『高尾』、『田山』と『大河原』、『野殿童仙房』との大きな違いは、最終年度の在学児童が執筆しているか否かである。前者は、執筆しておらず、後者は在学児童全員が執筆している。特に、『大河原』は、他の3校に比して児童数が圧倒的に多いにもかかわらず、在籍児童全員が執筆している。『大河原』は、在籍児童全員の手記に加え、在籍教職員による手記とあわせて「児童と職員のFOREVER」に一括しており、これと先述の「閉校に思いを寄せて(一般寄稿)」とが、「現役」対「OB・OG」という対比となっている。

このこととかわって、『高尾』、『田山』と『大河原』、『野殿童仙房』との違いで興味深いのは、冒頭のあいさつにおいて、前者は共に区長が登場するが、後者は登場しない点である。もっとも、『野殿童仙房』で区長が「あいさつ」するとなればであれば野殿区、童仙房区の両区長で

表4 閉校記念誌4誌の手記執筆者の分類別手記数

	『高尾』	『田山』	『大河原』	『野殿童仙房』
卒業生【a】	10	19	12	11
卒業生かつ保護者【b】	5	8	3	6
保護者【c】	2	5	8	9
教職員【d】	23	17	20	29
教職員かつ卒業生【e】	2	4	2	0
在学児童【f】	0	0	101	14
その他、不明【g】	2	2	1	3
手記総数【a+b+c+d+e+f+g】	44	55	147	72

※卒業生、卒業生かつ保護者、保護者、教職員かつ卒業生の分類別の数字は、手記中にそのように明記されているもののみによってカウントしている。それぞれに該当しながら、そのことを手記中に明記していない場合もありうるので、実際の数字は上記した数字と若干異なるものと考えられる。

表5 閉校記念誌4誌の手記執筆者のうち卒業生と教職員の人数とその内訳

	『高尾』	『田山』	『大河原』	『野殿童仙房』
卒業生総数【a+b+e】	17(38.64%) 〔100%〕	31(56.36%) 〔100%〕	17(11.56%) 〔100%〕	17(23.61%) 〔100%〕
うち保護者でもある【b】	5〔29.41%〕	8〔25.81%〕	3〔17.65%〕	6〔35.29%〕
うち教職員でもある【e】	2〔11.76%〕	4〔12.90%〕	2〔11.76%〕	0〔0.00%〕
教職員総数【d+e】	25(56.82%) 〔100%〕	21(38.18%) 〔100%〕	22(15.60%) 〔100%〕	29(40.28%) 〔100%〕
うち卒業生でもある【e】	2〔8.00%〕	4〔19.05%〕	2〔9.09%〕	0〔0.00%〕
手記総数【a+b+c+d+e+f+g】	44(100%)	55(100%)	147(100%)	72(100%)

※（ ）は手記総数に占める割合，〔 〕は卒業生総数、教職員総数毎にそれぞれの総数に占める割合を示している。

すむが、『大河原』の場合は、6区長に登場願わねばならないという事情もあろう。だが、『野殿童仙房』には「歴代教育委員・区長より」という項目において当時の野殿区長と元区長による手記が登場するが、『大河原』には現、元区長の立場からの手記は登場しない。在学児童による手記の有無と重ね合わせると、大河原小学校にとっての閉校は、学校教育上の問題としての側面が強いのに対し、高尾小学校や田山小学校の閉校は、学校教育上の問題であると同時に、何より地域にとっての重大事として受け止められたのではないかというふうと考えられるのではないだろうか。

では、手記の執筆者について詳しくみてみよう。本稿では、執筆者を、卒業生(a)、卒業生かつ保護者(b)、保護者(c)、教職員(d)、教職員かつ卒業生(e)、在学児童(f)、その他(g)、に分類した。もっとも、手記から読み取れる範囲内で分類しているにすぎないので、たとえば、実際には当該校の卒業生でありかつ自身の子どものも当該校に通っているにもかかわらず、手記のなかで保護者であることを言及していない場合には、その執筆者は卒業生に分類されることになる。しかし本稿では、手記の執筆者の実際の属性よりも、閉校への想いを寄せるにあたっていかなる立場からそうした想いを述べているか、閉校となった学校に対する執筆者の意識的な立ち位置を

とらえることを優先したい。

なお、保護者や教職員に関しては、過去にそうであった執筆者と閉校当時にそうであった執筆者の現元双方を含む。また、卒業生には、当該校で卒業はしていないものの一時期在学していた執筆者も含んでいる。さらに、野殿童仙房小学校の卒業生には、大河原小学校の分校教室・分教場・分校の卒業生も含んでいる。

手記の構成一覧を示した表3の各項目の内訳において、それぞれの執筆者に添えられている属性は、以上の分類に従っている。また、この執筆者の分類毎に、寄せられた手記の数をカウントしたのが表4である。『大河原』の手記総数がずば抜けて多いが、これは在籍児童全員が執筆しているからである。『大河原』と『野殿童仙房』から在籍児童分を除くと、『大河原』が46人分、『野殿童仙房』が58人分の手記となり、『高尾』や『田山』の手記総数とさほど違わない。

次に、手記の執筆者における、卒業生の総人数(a+b+e)と、そのうち子どもも当該校に通った保護者でもある人数(b)、あるいは後に当該校の教職員となった人数(e)、ならびに、教職員の総人数(d+e)と、そのうち当該校の卒業生である人数(e)を示したものが、表5である。『高尾』『田山』における卒業生による手記の割合が、他の2誌に比して高い。その卒業生総数にしめる「卒業生かつ保護者」の割合をみると、『大河原』に比して他の3誌は30%前後と高く、卒業後も地域にとどまり続け、地域住民としての側面を有する執筆者が一定存在することが看取できる。何より『高尾』が、卒業生や「卒業生かつ保護者」らによる手記を「地域の思い」と一括していることが象徴的である。また、『大河原』に比して他の3誌は、手記総数に占める教職員による手記の割合も4割前後から6割弱と高い。その教職員総数のなかで、『田山』には卒業生が20%弱存在している。

以上、京都府南山城村における学校統廃合によって、閉校となった4校の閉校記念誌の構成をみてきた。閉校となった学校にかかわる創立以降の資料が掲載されていたり、これまで学校にかかわってきた多様な人々からの手記が寄せられている点で共通している。一方で、閉校記念誌毎の違いもあり、特に手記の構成にかかわって、最終年度の在籍児童による手記や、地域の区長によるあいさつや手記の有無、あるいは、子どもが当該校に通った保護者でもありながら自分も当該校の卒業生であるという立場からの手記の数などで違いがみられる。この違いをふまえると、大河原小学校に比して、他の3校の閉校が、学校教育上の問題であると同時に、何より地域にとっての重大事として受け止められたのではないかということがうかがえるのである。

3. 閉校記念誌にみる学校と地域とのかかわり

では、実際に閉校記念誌に寄せられた手記を、特に学校と地域とのかかわりという観点からみていくことにしたい。以下、学校と地域とがどのようにかかわったのかを具体的に記述している手記を取り上げる。

3-1. 教育活動における学校と地域とのかかわり

まず、学校の教育活動において、地域と出会う場面をみてみよう。最初にみるのは、1994年頃

に高尾小学校が環境教育推進校に指定されたときのことをふりかえった、教職員による手記である。

校長先生が学校西の荒地を借り、池、田、畑を作ると言われ、池では生き物の観察をし、田ではもち米を作り、畑では野菜を作ると言われた。…（中略）…近所の方にお世話になり、ウンボで高低を直していただきました。池は職員と高学年で砂袋を積み、水漏れを防ぎ、やっと池らしく、田らしくできた頃は、3学期も終わりに近づいていました。／田植えの準備にかかるため、田を耕す人や稲の確保をしなければなりません。PTA や近所の方^{ママ}のお願いしてお世話になることにし、やっと5月には田植えが出来るようになりました。／…（中略）…田を耕したり、苗をいただき、脱穀機をお借りし、白引きをお世話になり、これも皆PTA や近所の方のお陰と心からお礼申し上げます（『高尾』、15頁）。

環境教育推進校に指定されてからの苦勞がかいまみえて興味深いが、そのために必要な土地の造成や、池づくり、米づくりに、地域住民によるウンボや脱穀機を従えての協力が得られたことがわかる。このような、学校の教育環境の整備に地域住民の協力が得られたという手記は、『野殿童仙房』や『田山』にも登場する。

学校のそばには小川が流れている。高原にしては渴れることもなく、きれいな水が流れている。その水を汲み上げるというのである。ここで地域の方々の底力。皆さん総出で土嚢をつみ、ポンプで水を汲み上げ、プールに注水。見事、プールは満水（『野殿童仙房』、17頁）。

校区には学校や子ども達を大切に思ってくださいる人達が沢山おいでになります。／子どもたちが登校する前に校門前の落ち葉を掃除したり草を刈ったりしていただいている方、庭にたくさん咲いたからと学校に花を届けてくださる方、学校便りを置いていただいている郵便局や農協、婦人の家の皆さん等いつもニコニコ子ども達を見守っていただいている方がいっぱい（『田山』、20頁）。

前者は、野殿童仙房小学校で1991年度から3年間、後者は田山小学校最後の1年間を、それぞれ勤務した教職員による手記である。こうした学校の教育環境の整備に加えて、学校では、社会科や総合的な学習の時間の授業をはじめとして、地域を舞台としたさまざまな教育を行っているが、そうした際にも地域住民の積極的な協力が得られたことが、教職員の手記に記述されている。たとえば、『高尾』には、1985年度から6年間高尾小学校に勤務した教職員による手記が掲載されているが、そのなかで、「社会科で、『田ではたらく人』『山ではたらく人』の学習にはいると、米づくりやしいたけ栽培・製茶作業等の、その時々^{ママ}の見学や体験学習を快く引き受けてくださり、丁寧にわかりやすく教えていただく等、たくさんの方々にのお世話になりました」と記されている（『高尾』、10頁）。また、『野殿童仙房』では、閉校時の校長によるあいさつのなかで、学校が「地域とともに教育を積み重ね、歴史を刻んで」きたことが述べられているが、その具体的なエピソードとして、「総合的な学習では、田畑をお借りし、土作り・作物作りを我がことのように

教えていただいたり、地域のトマトやお茶づくり・炭焼きなどの工夫や苦心の結果の見事な特産物の作り方を細部に互って見学させていただきました」と記述されている（『野殿童仙房』、2頁）。

このように、手記からは、学校による教育活動において、地域が取り上げられ教員や子どもたちと地域住民とのかかわりが生じていることが確認できる。しかも、こうしたかかわりは、事前に計画された教育プログラムを体験するという予定調和的なかかわりにとどまらないようである。たとえば、次にみる、1995年度から8年間田山小学校に勤務した教職員による手記には、そうした予定調和を超えたかかわりが生じていることがかいまみえている。

「先生、わらび 採ってはんの？」「灰をまぶして、お湯かけて一晩つけておいたら、明日食べられるようになるよ。作り方はな…」／子どもたちとわらびを採っているところに声をかけていただき灰までいただきました。もちろん翌日は、みんなでわらびをおいしくいただきました。子どもたちは、「先生、おいしいなあ。先生、料理上手やなあ。」わたし「…。」秋になると、干し柿作りたいなあ。「ねえ。どこか、渋柿ない？」／子どもたちは、さっそく家で聞いてきてくれました。見よう見まねで柿をとり、皮をむきました。またまた助っ人をと呼びかけると、おばあさんたちが集まってくださいました。あつというまにむいていかれる手際よさに感心しながら、子どもたちといっしょうけんめい皮むきのわたし。つるすところも考えていただき、後の手順も教えていただいて、できたおいしい干し柿。…（中略）…／おとうさん、おかあさん、おじいさん、おばあさん、地域の方々に見守られて子どもたちは成長していきます。そしてわたしもたくさんのかことを教えていただきました。自然を満喫し、自然の中でたくさんのかことを学び、料理の腕（？）もあげてくれた田山小学校の8年間でした（『田山』、19頁）。

地域住民からの協力によって、教科書だけで得られる知識を超えてより生活に根ざした学びが得られたことはもちろんのこと、子どもたちのみならず教職員にも、事前に計画された授業展開の想定を超えた学びが生じている点が印象的である。

このように、学校は地域から教育上の恩恵を蒙っているのであるが、さらにはこうした学びが、逆に地域を力づける場合もある。次にみるのは、『野殿童仙房』に掲載された教職員の手記であるが、1953年にこの地域一帯に甚大な被害をもたらした南山城水害を題材とした総合的な学習の時間の取り組みにかかわるものである。

平成15年に総合的な学習の発表会のために「南山城水害」の劇に取り組みました。水害で壊滅的な被害を受け、そこから地域の再生に努力した人々の様子を劇にしたのですが、…（中略）…聞き取りをしたり、当時の記録フィルムを調べたりするなかで、救助も来ない陸の孤島となった厳しい環境の中で団結し、復興していく人々の粘り強さを強烈に感じました。／…（中略）…発表会当日。児童たちは緊張の中、精一杯演技をすることができました。劇の最後の場面で「大地の歌」を歌っているとき、舞台の上から児童たちは、涙を流しながら自分たちを見てくださっているお年寄りの方々の姿にびっくりし感動したと言いました。／自分たちが一生懸命学習した内容が地域の人々に感動を与え、自分たちも共に感動する。そんな

なすばらしい場面がたくさんある学校でした。子どもたちに「地域に誇りをもつ心」が養われていったように思います（『野殿童仙房』、27頁）。

この手記を読むと、学校が地域から教育上の恩恵を蒙っているのみならず、逆に学校の教育的な活動が地域を支えている面もあることがわかる。この手記の舞台は、総合的な学習の時間の発表会であり、このような地域住民も参加する学校行事の際には、学校と地域との相互の密接なかわりが生ずることになるようである。次にみる『田山』に掲載された卒業生の手記にある、戦後間もない時期の学芸会のエピソードもそのことを物語っているだろう。

あの頃の学校生活で今と随分違うなと思う点は、秋になると運動会の他に冬に向けて「学芸会」と言う大きな発表会があった事です。二学期が始まった段階から教室の机を後に押しやって、各学年は劇や踊り、歌、等の練習に明け暮れたものでした。そして今ではとても考えられない「昼の部」、「夜の部」があって、講堂に入りきれない位、村民の皆さんが見に来て下さって大きな拍手をいただいた事を思い出します。これは子どもたちに発表の機会を与え、大きな自信をつけさせると共に、村民の皆さんを元気づける戦後復興へのカンフル剤になっていたのかも今になって思います（『田山』、28頁）。

『野殿童仙房』で頻繁に登場する地域住民も参加する学校行事は、「お茶の葉まつり」である。次に、順に、2003年度、2004年度の卒業生による手記をみてみよう。

お茶の葉祭りは、野殿童仙房小学校独特で毎年楽しみでした。私が小学校の時は、2組に分かれての劇と、全校での劇の三つだったのに、去年は人数も少なくなって、劇は二つでした。でも、劇を見ていると、私もあんな風にやっていたのかなあと少し思い出されました。先生達の出し物もとても面白かったです。また、お年寄りの店では、おじいちゃんから、昔の遊び（竹馬、竹とんぼetc.）を作って教えてもらったり、おばあちゃんに作ってもらう、昔よくたべたおかしにふれたり、毎年好評でした（『野殿童仙房』、35頁）。

六年生の思い出でもう一つ心に残っているのはお茶の葉祭りでした。おじいさんやおばあさんをよんでゲームをしたり、おじいさんやおばあさんに昔の遊び道具や、昔のおやつなどをおしえてもらいました。／私達はおじいさんやおばあさんに喜んでもらえるように、げきをしたり、歌を歌ってあげたりしました（『野殿童仙房』、35頁）。

「お茶の葉祭り」が、野殿童仙房小学校の特徴的な取り組みであるとともに、地域の高齢者から子どもたちが昔の遊びやおやつなどを教わり、逆に子どもたちや教職員が劇や歌で地域の高齢者を歓待することで、子どもたちにも強い印象を残す行事であることがわかる。この「お茶の葉祭り」について、1980年代の6年間、さらには1995年度から2001年度までの7年間、あわせて13年同校に勤めた教職員は手記のなかで、「お年寄りの知恵と力がいっぱい詰めて、地域の伝統や文化が花開く大イベントになってき」と評している（『野殿童仙房』、21頁）。

このような学校と地域との相互の密接なかわりが生ずる学校行事の代表格は運動会である。たとえば、『大河原』には、1993年度から1997年度にかけて大河原小学校に勤務した教職員による次のような手記が掲載されている。

運動会当日は、座席を確保するため、早朝より保護者や地域の方々が、ごさを敷きに来られ、賑やかな運動会が繰り広げられていました。／先生方もそれに応えるため、立派な演技をと構想を練り、それに備えたものでした。保護者や地域住民の和気あいあいとした心豊かな雰囲気子ども達に伝わり、豊かな心を育むもととなっていました（『大河原』、25頁）。

子どもたちの両親や祖父母のみならず、自分の子どもがいるかいないかにかかわらず、地域住民が多数運動会の見学に訪れていることがわかる。また、見学するだけでなく、運動会の種目にも地域住民が出場していたようである。たとえば、『高尾』には、運動会について、「自分の徒競走の緊張感よりも、何故か、消防団による南北対抗リレーで、大人たちの地響きたてて力強く走る姿と入退場門の後ろにあったキンモクセイの香りに強い印象が残っています」と記された、卒業生（かつ保護者）による手記が掲載されている（『高尾』、23頁）。運動会の思い出として、子ども時代に自分が出場したこと以上に、地域住民が出場したことや入退場門後方のキンモクセイの香りの方が強い印象として残っていることが大変興味深い。

さらに、運動会の見学や種目への出場にとどまらず、特に『野殿童仙房』に掲載された手記には、運動会の運営そのものにも地域住民が積極的にかかわっていたことが記述されている。たとえば、次にみるのは、『野殿童仙房』に掲載された、1991年度から1993年度まで野殿童仙房小学校に勤務した教職員による手記である。

秋は、運動会。なんと、地域の方々が入退場門づくりから、ライン引き、テント設置と次から次へと準備をしてくださる。まさに地域をあげての区民運動会である。運動会当日には消防団やPTAの方々も競技に花を咲かせてくださった。校門の近くでは、PTAの方々による模擬店も出店している。他の地域では見ることのできない和気あいあいとした雰囲気の中での、地域の方々とのふれあいにあふれる運動会であった（『野殿童仙房』、17頁）。

そもそも野殿童仙房地域では、1993年度から7年間勤務した教職員によれば、「区民運動会と小学校・保育所の運動会が協賛で行われた」ようである（『野殿童仙房』、26頁）。分校時代に入学し小学校6年生のときに野殿童仙房小学校の創立に立ち会った卒業生は、「運動会で両区のほとんどの方々が来てくださったり、いっしょになって盛大にくださった事を覚えています」と手記に記している（『野殿童仙房』、30頁）。1982年の野殿童仙房小学校の創立以来3年間勤務した教職員によれば、児童数が少ないがゆえに、「運動会は児童だけでは開催できなかった」という事情もあったようだが、「大人も子どもも一緒になってすべての演技に対して応援したのも地域ぐるみのもの」だったという（『野殿童仙房』、16頁）。地域住民が運営に携わり地域住民からの熱心な応援が得られることで子どもたちも勇気づけられ、学校の教育活動の一環である運動会を挙行するにあたり多大なる支援を受けたということにとどまらず、地域にとっても運動会が大変重要

なイベントでもあったことが看取できる。小学校の運動会を媒介に、学校と地域とが密接にかかわっており、運動会は、学校からみたときには教育活動の一環としての学校行事である一方で、地域にとっては地域のさまざまな様々な世代が一堂に会するいわば地域の「祭り」としての意味をも有している⁷⁾のである。それゆえ、野殿童仙房小学校最後の運動会は、地域にとっても大変複雑な心境であったことが、次の保護者による手記からもよく伝わってくる。

閉校が決まって迎えた区民運動会では、最後という事で多くの地域住民の方が参加して下さるなか、競技にも熱が入り、特に一輪車と組み体操の演技『ハンド・イン・ハンド』は子ども達のがんばりに感動し、心からの拍手を送りました。そして野殿区長、中村さんの音頭での「一本締め」で終わりを迎えた時は、その場に居合わせた一人一人の複雑な思いがひとつになり、さみしくも、清々しい瞬間を感じました（『野殿童仙房』、44頁）。

以上にみてきたように、閉校となった小学校の教育活動においては、地域住民の協力によって学校と地域とのかかわりがみられ、特に地域住民が参加する学校行事の際にはそのかかわりが密接となり、学校行事が地域にとっても重要なイベントとなることが、南山城村の閉校記念誌に掲載された手記からうかがえる。

3-2. 地域の拠点としての学校

では次に、小学校の教育活動以外の場面における、学校と地域とのかかわりをみてみよう。まず、子どもたちに対する教育活動の一環ではなく、教職員が地域と出会う場面を取り上げてみる。印象的なのは、学校への赴任にともなって地域と初めて出会ったり、一度他の学校へ異動となり再び同じ学校に赴任して地域と再会する場面である。

初めての赴任したときのエピソードとして、『高尾』には、1983年に赴任した教職員による、「歓迎会も盛大でした。確か、農協の2階で高尾区の各種団体等からたくさんの方に出席していただいたように思います」との手記が（『高尾』、8頁）、また『野殿童仙房』には、1991年に赴任した教職員による、「公民館で歓迎会をしていただいたとき、家で作ったという『濁酒（どぶろく）』が一升瓶で出てきました」との手記が（『野殿童仙房』、25頁）、それぞれ掲載されている。また、『高尾』には、かつて1988年度から1989年度に高尾小学校で勤務し、再び1996年に同校に赴任した教職員が、「『お帰りなさい。』と仰ってくださった地域の方々の温かい言葉が、今も忘れられません」と手記のなかで記述している（『高尾』、11頁）。さらに、『田山』には、1985年に3年ぶりに再び田山小学校へ赴任することとなった教職員による、次のような手記が寄せられている。

「お帰りなさい」と、購買部の方で女の人の声。これは、転任の挨拶で3年振りに訪れた南山城農協田山支所でのことである。振り向くと商品の向こうから松仲さんのお顔。何よりも暖かいお言葉である。これこそ3年前までの3年間教頭でお世話になった時の田山の親達の何よりの心尽くし。この後も挨拶回りで、たくさん頂いた。本当に有り難い田山の人達の声。今もまだ臉に残る当時である（『田山』、11頁）。

『高尾』、『田山』、『野殿童仙房』からは、教職員が初めて赴任したときには地域から大いなる歓待を受け、また他校へ異動となり再び同じ学校へ赴任したときには地域から再会を歓迎され、教職員を大いに喜ばせていることがわかる。地域のソトからやってきた教職員を地域が歓待しつつ受け入れており、学校の教職員と地域との距離の近さを感じる。

しかも、この距離の近さは、もちろん赴任当初にとどまるものではない。『高尾』に掲載された手記のなかで、1990年度の一年間高尾小学校に勤務した教職員は、「台風接近のため校長先生と2人で泊まりこんだ時、地域の役員さんがわざわざ学校まで様子を見にきていただいた」と記述している（『高尾』、13頁）。また、同じく『高尾』には、1989年度から7年間高尾小学校に勤務した教職員が、次のような手記を寄せている。

高尾の地区では、他では見られなくなってしまった伝統行事がたくさん残されていて、そして、子供達もその中で大切な役割を果たしていたように思います。秋の祭りや冬のかゆ占いなど豊かな収穫を願うこれらの行事に、子供達と一緒に参加させてもらったときのことをとても懐かしく思い出します（『高尾』、12～13頁）。

このように、教職員のことを地域住民は常に気にかけていると同時に、学校の教育活動の一環ではない地域の行事に、教職員は子どもたちとともに参加していたのである。こうした距離の近さは、『高尾』の卒業生による手記のなかに、「毎年10月17日に講堂で行われた青年団の慰安演芸会、なぜか小学校の先生が青年団に入りギターを弾いていた。今は高尾の人だ—」という記述が登場するほどである（『高尾』、26頁）。

次にみるのは、『野殿童仙房』に寄せられた、野殿童仙房小学校に1983年に初めて赴任したときのことを振り返った教職員の手記である。

今でも鮮明に覚えています。赴任当時に話しかけられた忘れない言葉があります。それは、初めての家庭訪問のとき、「センセ、一杯飲みながら、学校のこと話しよう。」（もちろんその時、わたしは飲酒していません。）…（中略）…ある日、学校の近くを歩いていると、「センセ、このあたりの空き地をあげるから、ここに家建てて住まないか？」…（中略）…。／赴任したての張り切り新米教師だった当時のわたしの気持ちを差し引いても、「ずっと、この学校で教員として働くぞ。」と思わせる、何よりの歓迎の言葉でした。／学校にいと、「センセ、寄り合いの資料、コピーさせてくれ」、運動場に雪が積もると、「雪合戦が終わったら、うちのブルドーザーで雪かきしてやるゾ」などと声をかけてくれるお父さんたち、行事のたびに子どもたちと一緒に料理の腕をふるってくれたお母さんたち。運動会や学習発表会は若いも若きも総出演、子どもたちが踊った民舞「ソーラン節」や「花笠踊り」に涙を流して応援してくれたおばあちゃんもいて、まさに地域の教育・文化センターとしての野殿童仙房小学校でした（『野殿童仙房』、21～22頁）。

この手記が物語るように、学校の教職員と地域とは大変距離が近く、この近さがそのまま学校と地域との密接なかかわりにつながっている。この密接なかかわりは、学校の教育活動への地域

の惜しめない協力という側面もあるが、地域にとっても学校が「文化センター」であるという側面もあることがみてとれる。

このように、学校が地域の拠点としての側面を有しているがゆえに、地域住民は学校の校舎をさまざまな用途で活用してきた。閉校記念誌に目立つのは、先にも登場したが、『高尾』『田山』における青年団のエピソードである。たとえば、『高尾』には、「講堂では毎年、青年団の演芸会があって、場所取りに座布団を持って昼頃から出かけていったなあ」という1973年の卒業生（かつ保護者）による手記が寄せられているし（『高尾』、27頁）、『田山』には、同じくらの時期の卒業生（かつ保護者）による次のような手記が寄せられている。

昔は、青年団活動が活発であり、盆踊り、映画会、演芸会など、すべて、田山小の校庭、講堂がメインでありましたので、夜に教室が空いておりました。／そこで上級生達と一緒に、廊下で、競走をし当番の先生に、どなられたのを憶えています（『田山』、22頁）。

また、青年団に限らず、特に『田山』には、小学校の校舎が地域住民に多様に活用されてきたことを記述している手記が散見される。たとえば、1967年の卒業生による手記には、「盆になると校庭で盆踊りをしたり育友会の納涼映画会を校庭で蚊に刺されながら観たりしたことなどの楽しかった行事が今でも直ぐに思い出されます」という記述があったり（『田山』、35頁）、1986年度から6年間勤務した教職員による手記には、「校長室は、時には、田山区のサロン、殿堂ともなりました」という記述もみられる（『田山』、12頁）。小学校3年生の時に終戦を迎えたという卒業生（かつ保護者）が、「青年団の頃は村民慰労の演芸会の為、運動場に大きな野外舞台を組み立てる等盆過ぎから村祭りの頃迄、昼夜を問わず毎日程迷惑も考えずに使用させていただいたことは、開かれた学校の考え方は、その時点から根づいていたんだと、今になって改めて感謝している」と手記のなかで語るとく（『田山』、43頁）、昨今の教育改革のキーワードである「地域に開かれた学校」や「学校と地域社会の連携」がかすむほど、そもそも学校は地域の拠点として、地域との密接なかかわりを有していたことが『田山』からうかがい知れるのである。

以上にみてきたように、『高尾』『田山』『野殿童仙房』から看取できるのは、子どもたちへの教育活動であるか否かにかかわらず、閉校となった小学校の教職員が地域住民と近い距離でかかわっており、また小学校が地域の拠点としての役割を担い、学校と地域とが密接なかかわりを有してきたことである。⁸⁾

4. むすびにかえて

本稿では、学校統廃合が行われた京都府南山城村における4小学校の閉校記念誌を手がかりに、学校と地域とのかかわりがいかに記憶されようとしたのかをみてきた。

閉校記念誌の構成をみると、創立以降の学校の資料が掲載されていたり、これまで学校にかかわってきた多様な人々からの手記が寄せられている点で共通している。一方で、閉校記念誌毎の違いもみられ、とりわけ『高尾』『田山』『野殿童仙房』からうかがえるのは、小学校の閉校が、

学校教育上の問題であると同時に、何より地域にとっての重大事として受け止められたのではないかということであった。

また、閉校記念誌に掲載された手記をみると、閉校となった小学校の教育活動においては、地域住民の協力があって地域とのかかわりがみられ、特に地域住民が参加する学校行事の際には、そのかかわりがより密接となることがうかがえるのであった。さらには、教育活動以外にも、閉校となった小学校の教職員が地域住民と近い距離でかかわっており、また小学校が地域の拠点としての位置づけを地域から付与されており、学校と地域とが密接なかかわりを有してきたことが、とりわけ『高尾』『田山』『野殿童仙房』から看取できるのであった。

それゆえ、閉校によって地域から小学校を失うことの喪失感は、地域にとって大きなものである。次は、『高尾』、『野殿童仙房』に掲載された卒業生による手記である。

数年前には、高尾聖愛保育園も閉園となり寂しい限りです。家が小学校や保育園に近いということもあり、子供達の楽しく学校生活を送っている声がよく聞こえてきて、静かな山里を活気づけてくれていたことを思い出します（『高尾』、21頁⁹）。

学校の側を通る度に子ども達の元気な歌声を聞いたり校庭で明るく楽しく遊んでいる姿を見ては癒された気持ちになったものです。そしてこの小学校は子どもを通して地域の人々が集い語り合う唯一の懇親の場でもありましたが、廃校になる事は実に寂しい思いがします（『野殿童仙房』、6頁）。

前者は1975年度の卒業生、後者は分校時代の卒業生であるが、眼前から子どもたちの姿が消えることが、地域の風景を一変させることに対する喪失感が語られている。あわせて、学校がなくなることで、これまでみてきたような学校と地域とのかかわりをも喪失することが語られている。

教職員もまた、閉校による地域への影響を慮っている。次にみるのは、『高尾』、『野殿童仙房』に掲載された教職員による手記である。

いま、高尾小学校の長い歴史に幕が閉じられる日を迎えて、地元の方々は、ことのほか寂しく思っておられることでしょう。夏が終わりに近づいたあの日、クレーン車に容赦なく崩されていく木造校舎を感慨深げにみつめておられた保護者の方や地元の方々の姿と重なります（『高尾』、8頁）。

学校が地域のセンター的な役割を担い、地域の活性化に貢献してきたにちがいないと思うにつれ、このすばらしき楽園から、学校がなくなってしまうことは残念でなりません。地域をつなぐ学校の消滅で、野殿と童仙房の地域の灯が消えてしまうのではないかと危惧してしまう気持ちはぬぐいきれません（『野殿童仙房』、21頁）。

前者の『高尾』に掲載された手記にある木造校舎とは、現存する1983年築の鉄筋コンクリート造校舎の建設にもなって取り壊された木造校舎のことである。この木造校舎は、戦後すぐに地

域住民が尽力し子どもたちまでもが手伝って竣工したものであっただけに、取り壊しに際しては地域に深い感慨をもたらしたが、今度は学校そのものの消滅を地域は受け止めなければならない。そのことの意味は、単に地域の風景を変えるにとどまらず、地域に住むあらゆる世代の多様な人々を媒介する「地域のセンター」を失うことでもあることが、後者の『野殿童仙房』に掲載された教職員による手記で語られている。なお、この教職員は、先述の計13年野殿童仙房小学校で勤めた教職員である。

閉校記念誌から示唆されるのは、学校の教育活動上も、そして地域にとっても、学校と地域との相互のかかわりのもつ意味の大きさである。学校統廃合は、こうしたかかわりを消滅させることにつながり、その影響は地域のあらゆる世代にかかわる。学校統廃合にあたっては、「切磋琢磨」という量の問題に還元された教育的ロジックだけで推進するのではなく、これまで地域とのかかわりによって学校が行ってきた教育活動の積み重ねがあり、さらには学校が地域の拠点としての役割をも担ってきたことを、併せて想起する必要があるのではないだろうか。そして、やむなく閉校に至った場合には、そのことによって失う学校と地域とのかかわりをいかにして補完していくかについても考える必要があるだろう。以上のことを、閉校記念誌において記憶することの意味についても、今一度顧みられてもよいのではないか。

京都府南山城村における4校の閉校記念誌のさらなる分析や、閉校記念誌の分析によって得られる知見と筆者らがこれまで実施してきたフィールド調査¹⁰⁾で得られた知見とを重ね合わせたの考察については、今後の課題としたい。そして、学校統廃合にともなう閉校によって、失った学校と地域とのかかわりを補完する具体的にあり方についても、稿を改めて考えたい。

注

- 1) 以上の「手引」, 「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引の策定について（通知）」, およびこの「通知」に添えられた「学校規模適正化関係参考資料」は、文部科学省のホームページを参照。http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shugaku/detail/1354768.htm（「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引の策定について（通知）」）, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2015/07/24/1354768_1.pdf（「手引」）, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2015/01/29/1354768_3.pdf（「学校規模適正化関係参考資料」）。
- 2) 南山城村公式ホームページ（<http://www.vill.minamiyamashiro.lg.jp>）を参照。
- 3) なお、南山城小学校の現在の正式名称は、「相楽東部広域連立南山城小学校」である。これは、2009年度に南山城村、和東町、笠置町の三町村による相楽東部広域連合教育委員会が発足したことにともなうものである。
- 4) 南山城保育園、南山城村保健福祉センターとの複合施設である南山城小学校の校舎については、拙稿「学校施設の複合化をめぐる」『学校施設の複合化に関する研究』（平成16年度～平成18年度科学研究費補助金研究成果報告書、研究代表者 四方利明）、2007、拙稿「学校建築と地域社会—京都府南山城村における学校統廃合の事例から」『立命館経済学』第58巻第3号、2009、および拙著『学校建築の諸相』阿吽社、2012、で取り上げて考察している。
- 5) 大河原小学校の閉校記念誌に掲載された2003年3月3日現在の児童数による。一方で、同じく閉校記念誌に掲載された校長によるあいさつでは児童数は101名と書かれており、同じく閉校記念誌に掲載された最終年度の在籍児童による手記は101名分あるので、年度の途中で2名減少したのと思われる。

- 6) 2006年5月1日現在。全国学校データ研究所『全国学校総覧 2007年版』原書房、2006を参照。
- 7) 閉校記念誌ではさほど記述がないが、高尾小学校や田山小学校の運動会も同様に、教育活動であるのみならず地域の「祭り」としての意味を有してきたことは、筆者らが2004年から2005年にかけて実施した田山区、高尾区における地域住民対象の聞き取り調査（半構造的インタビュー調査）から明らかになっている。この聞き取り調査は、科学研究費補助金による共同研究「学校施設の複合化に関する研究」（2004年度～2006年度、研究代表者：四方利明）において実施したものであり、この調査については、前掲『学校施設の複合化に関する研究』にまとめている。また、田山小学校の運動会が地域の「祭り」としての意味を有してきたことについては、前掲「学校建築と地域社会—京都府南山城村における学校統廃合の事例から」において考察している。
- 8) 『大河原』にも、在籍児童による次のような手記が掲載されている。

学校の体育館で火曜日にバドミントンをしています。夜の7時から、大人の人たちと、9時ごろまでしています。運動場ではゲートボールをしている人たちと、よく一緒になって、「こんばんは。」や、「さようなら。」などを言うのが楽しみです。／でも、体育館などがなくなってしまうと、バドミントンは、いったいどこですればいいのだろうかあとと思いました。せめて、ゲートボールなどスポーツができたり、子供が遊べる広場ができたらいいなと思いました（『大河原』、75頁）。

しかし、他の3誌と比べると、学校と地域とのかかわりについて具体的に記述した手記は少ない。一つには、先にも述べたように、校区が6区にまたがっていることが大きいかもしれない。大河原小学校が位置する本郷区在住の卒業生は、「尋常小学校、青年学校、国民学校等々と、名前は変化しつつも、南山城村の本郷区の中に凜と存在し、地域の人々と共に歩んで来た学校の“灯火”は、私たちの心の中に永遠に点り、続けていく事を願ってやみません」と手記のなかで記している（『大河原』、18頁）。大河原小学校区のなかでも、本郷区にあっては、大河原小学校は地域の拠点としての位置づけを付与されていたのかもしれない。

- 9) この手記の執筆者は、今現在は高尾地区から離れたところに住んでいるために、「思い出します」との記述になっている。
- 10) 前掲の科学研究費補助金による共同研究のほか、同じく科学研究費補助金による共同研究「地域社会における学校の統廃合と複合化に関する研究」（2007年度～2009年度、研究代表者：四方利明）、「学校統廃合と地域社会の変容に関する総合的研究」（2010年度～2012年度、研究代表者：中島勝住）、「少子高齢化地域の存続と小規模学校の継続可能性についての総合的研究」（2013年度～2015年度、研究代表者：中島勝住）においても、京都府南山城村におけるフィールド調査を実施してきた。